

# 青少年の居場所と生涯発達

板橋区大原生涯学習センター社会教育指導員  
(日本子育て学会研究交流部門長)

西村美東士

<http://mito3.jp>

1. 社会化と個人化ともう一つ
2. 青少年の個人化と社会化の不全と進展
3. 個人化と社会化の一体的支援
4. 青少年の居場所づくり骨格
5. 書評より1 「ギリギリスの生き方」
6. 書評より2 「個人化社会の生き方」
7. 書評より3 「ワーク・ライフ・ソーシャルバランス」

# 社会化と個人化ともう一つ

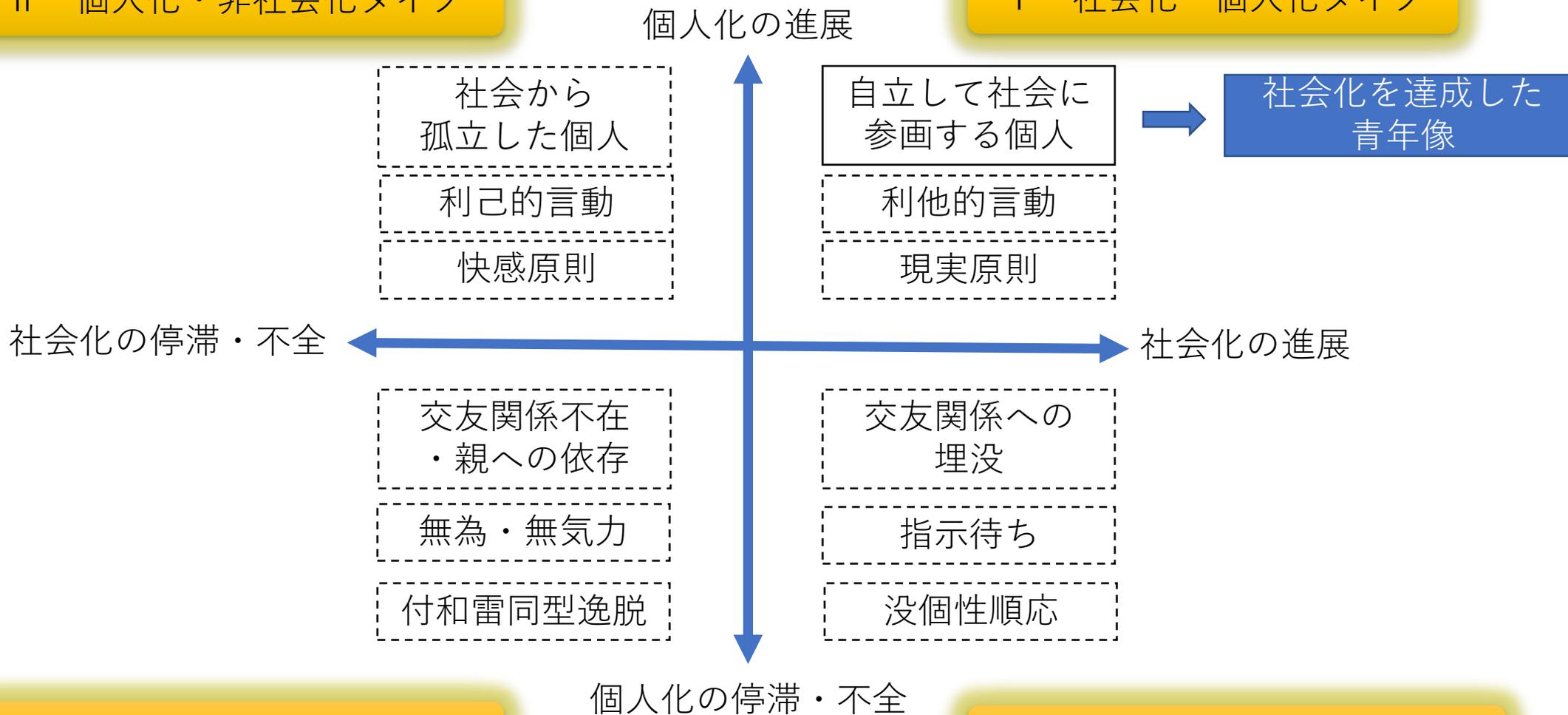
- 第一の支援 社会化支援
- 将来、社会の中で充実して生きる能力獲得プロセスの支援
- 第二の支援 個人化支援
- 将来、個人として充実して生きる能力獲得プロセスの支援
- 癒し 原点回帰
- いま、人間らしい感覚にリセットすること
- 第三の支援 居場所づくり等
- いまを充実して生きるため
- 押しも引きもしないが、肩を押すことはある。

# 青少年の個人化と社会化の不全と進展

西村美東士「青年教育研究30年から見えてくるもの－個人化を育む社会化支援教育の今日的課題」、日本青年館『社会教育』832号、pp.32-45、2015/10

II 個人化・非社会化タイプ

I 社会化・個人化タイプ

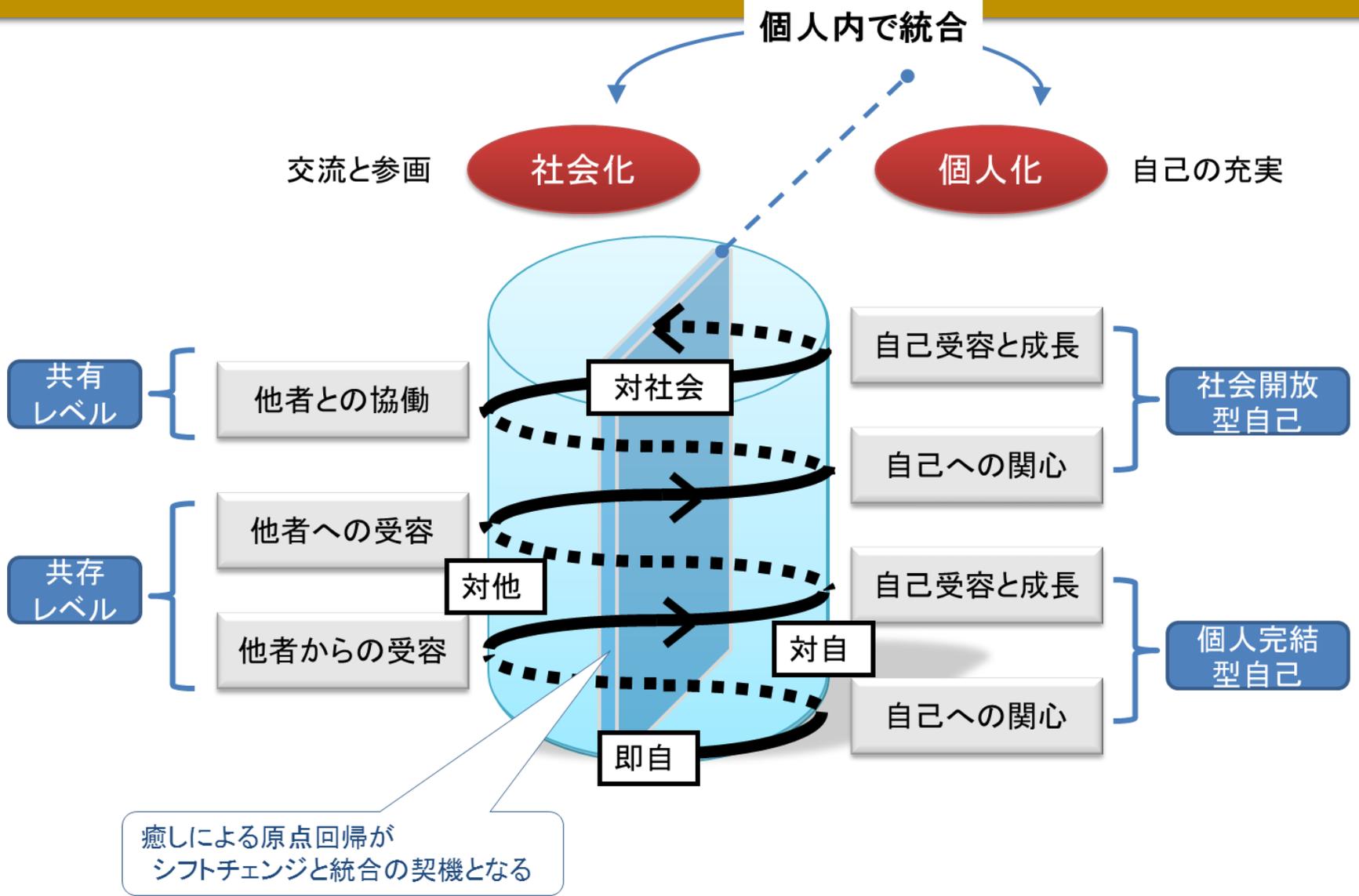


III 非個人化・非社会化タイプ

III 社会化・非個人化タイプ

# 個人化と社会化の一体的支援

西村美東士「個人化の進展に対応した新しい社会形成者の育成ーキャリア教育及び青年教育研究の視点から」、日本生涯教育学会年報33号、pp.145-154、2012/11



個人内で統合

社会化

個人化

交流と参画

自己の充実

共有  
レベル

他者との協働

対社会

自己受容と成長

社会開放  
型自己

共存  
レベル

他者への受容

対他

自己への関心

自己受容と成長

個人完結  
型自己

他者からの受容

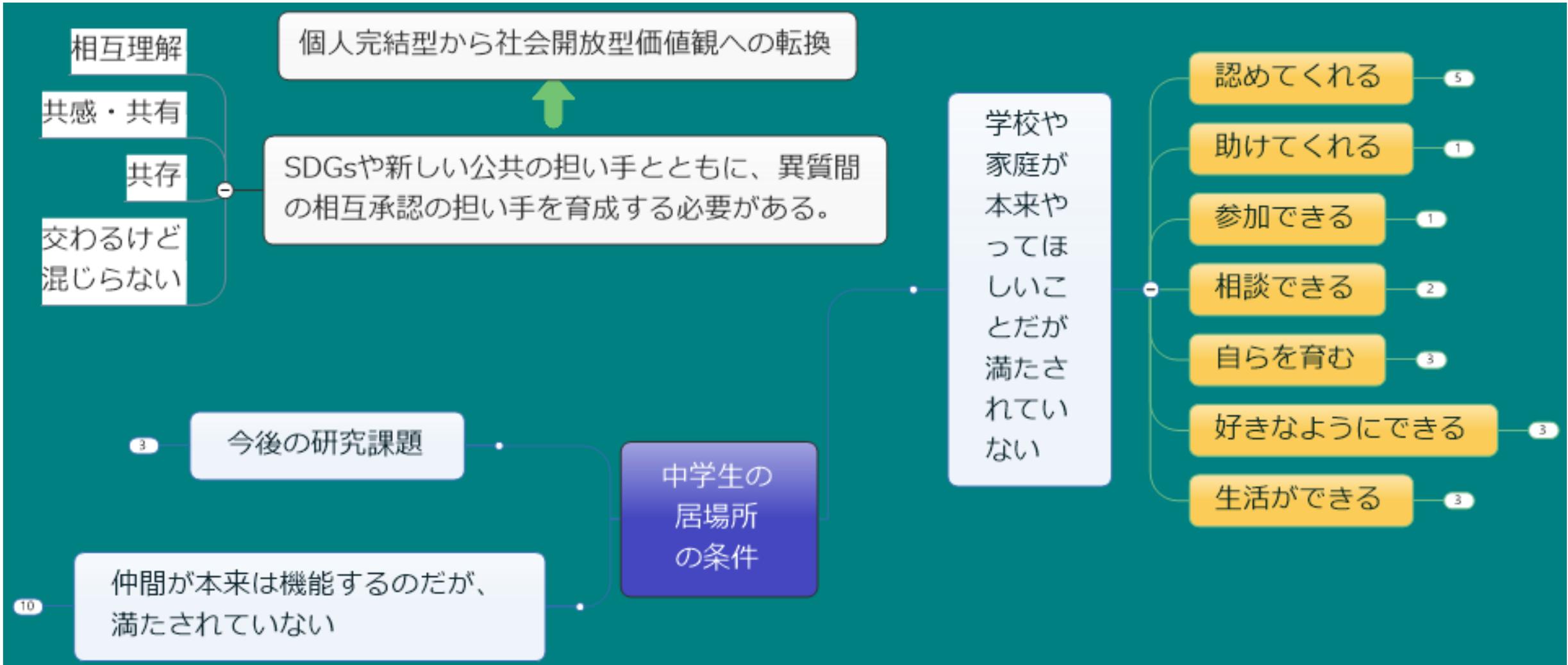
対自

自己への関心

即自

癒しによる原点回帰が  
シフトチェンジと統合の契機となる

# 青少年の居場所づくり骨格



# ギリギリスの 生き方

泉谷閑示『仕事なんか生きがいにするなー生きる意味を再び考える』幻冬舎新書、2017/1、日本教育新聞社編『週刊教育資料』西村美東士書評、2017/9

しつけや教育  
で去勢しないでほしい

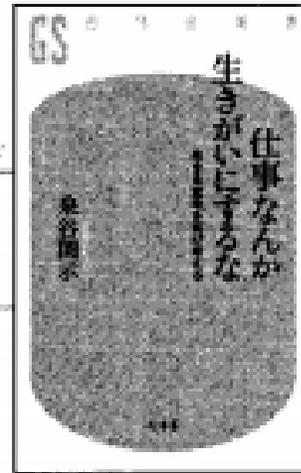
## ブック

泉谷氏は、会社や生活等のために生きるのをやめ、心のおもむくままに日常を遊ぶよう勧めらる。教職に就く者にとつては、

悩ましい本である。氏は生きる意味を問う「実存的な問い」を、最も人間的な行為とする。また、

中年期の危機とは、「社会的自己実現」の悩みを持つ青年期と違って、ある程度社会的役割を果たした人生の後半に湧き上がってくる。「私は私らしく生きてきただろうか」といった、社会的存在を超えた

一個の人間存在としての「実存的な問い」に向き合う悩みだという。青年期には重要に思えた「社会的」とか「自己」といったものが、必ずしも真の幸せにはつながらない「執着」の一種に過ぎなかったことを知り、一人の人間として「生きる意味」を問い始めると言うのだ。また、



仕事なんか生きがいにするな  
生きる意味を再び考える

泉谷閑示 著  
842円 幻冬舎新書  
03-5411-6222

今日では、青年期においても、そのような「実存的問い」が見られると言う。

氏は、イソップ物語のアリとギリギリスの例を示す。わが国では、サブカルチャーにおいては世界をリードする勢いを持っているが、カルチャーそのものについては十分ではないとし、ギリギリスのような、憧れるに耐える文化を生み出すことが、現代の虚無に押し潰されないうために求められているという。

評者は考える。多くの子どもたちはサブカルに走り、教師もそれを受け止めなければならぬ。文化は押しつけでは育たないからだ。しかし、個に応じた指導を考へるならば、生きにくさを感じながらも「実存的問い」や正統派の文化を追い求めるタイプの子どもたちに対しては、イソップ物語のアリのような「未来」だけでなく、ギリギリスのような「今」の充実のための支援を検討する必要がある。

(聖徳大学教授・西村美東士)

# 個人化社会の 生き方

篠田桃紅『一〇三歳になってわかったこと～人生は一人でも面白い』、幻冬舎、2015/4  
日本教育新聞社編『週刊教育資料』西村美東士書評、2015/10

年甲斐もなくとか、いいトシをしてとか、よく言いますね。そもそも、トシというのは、一体、いつからが、いいトシなんでしょう。



ブック

篠田氏の「一人で自由に生きる」という指針は、社会化重視の教育の価値観と一線を画している。彼女は、生涯一人身で、

美術家団体にも属さず、墨を用いた抽象表現主義者として活躍しており、今でも人生の楽しみは無尽蔵だと言う。人という漢字は、「人が支え合う」のではなく、古来の甲骨文字では、一人で立ち、両手を前に出して、何かを始めようとしているのではと彼女は言う。また、歳をとると、過去を見る目に変化が生まれ、肯定、否定の両面が生じ、あきらめと悟りが生ずる。彼女は、これを、高いところから自分を俯瞰する感覚だと言う。個人化社会における「無所属」「悟り」の若者と通じるところがあり、若者や退職を控えた教員にとって参考になると思われる。

「結構」という言葉は、良いと



篠田桃紅 著  
1080円 幻冬舎  
☎03-5411-6222

一〇三歳になってわかったこと  
～人生は一人でも面白い～

いう意味と、いらぬという意味が同居している。彼女は、これを、余白を残し、臨機応変に加えたり減らしたりすることのできる「いい加減」という言葉と同様の日本文化の良さだと言う。西欧流の自己主張の教育ばかりが良いのではないかもしれない。

そのほか、常識に生きなかつたから長生きできた、ほかに頼らずに自分の目で見る、人生を歳で決めたことはない、規則正しい毎日から自分を解放する、などの含蓄に富む言葉があふれている。とりわけ、「自由と個性を尊重するから孤独」かつ「コミュニケーションが大切」、孤立ではなく、人と交わらないのもなく、混じらない、よりかからないという考え方は、仲間と群れたがる若者にとっても組織の一員としての教員にとっても、個人化社会を充実して生きていくための根源的な示唆を与えてくれよう。

(聖徳大学教授・西村美東士)

# ワーク・ライフ・ソーシャル・バランス

川島高之『いつまでも会社があると思うなよ!』、PHP研究所、2015/9

日本教育新聞社編『週刊教育資料』西村美東士書評、2015/11

MBA（経営学修士）のロジックを多額のお金と期間をかけて学ぶよりも、PTAでOn the Job Training (OJT) をしたほうがよっぽど力がつく。

## ブック

他者との対立や私生活への犠牲を避けようとする今の若者を、流動化社会の中でどう育てるか。川島氏は、社員を育てる「イクボス」が必要だと言う。それは、部下の私生活に配慮しながら、業績目標を達成させるという「新しい管理職像」である。その要件は「部下の私生活とキャリアを応援している」「自らも仕事と私生活を両立させている」「業績目標の達成に強くコミットしている」の三つである。氏は、仕事（ワーク）と共に、私生活（ライフ）と社会活動（ソーシャル）という「3本柱の生活」が人生を強く豊かなものにしてくれると言っている。

さらに氏は、時間泥棒トップ3として、「資料作成」「メール」「会議」を挙げる。たとえば会議については、ゴール決め、資料の事前配布、人数絞りの三つで



川島高之 著  
1512円 PHP研究所  
☎03-3520-9633

いつまでも会社があると思うなよ!

時間は8分の1になると言う。ただし、その生産性とは、「アウトプット」÷「インプット」であることから、分母である時間の削減幅以上に、分子である成果を収縮させないよう警告する。その上で、残業している社員より成果を出すよう求める。この「結果志向」が若者に支持されているようだ。

氏が代表を務めるNPO「チカラ・ニッポン」では、苦手や弱点ではなく、得意なこと、得意なこと、得意なことに注目する。そして、社会で役に立つ経験を与えて「貢献心」を育てることによって、子どもの自主性と社会性を育てようとしている。

評者は考える。若者の帰属意識の不足などを批判するだけでは教育は始まらない。仕事だけではなく、私生活、社会活動のそれぞれの場で、幸せな生涯を送るための基礎・基本を、個人差に応じて身につけさせることこそ、生涯学習時代の学校教育の役割といえよう。

（聖徳大学教授・西村美東士）